

日本の身下相談・序説

——近代日本における「性」の変容と隠蔽——

赤川 学

概 要

読売新聞「人生案内」欄を素材として、「資料に向かい合う作法」としてのセクシュアリティの歴史社会学を实践する。第一に、1935～95年に掲載された身上相談を、見田宗介が用いた分類を修正しつつ、10年おきに量的分布の変遷を調べた。恋愛と結婚に関する悩みは漸減する一方、自己の性格や心に関する悩みが増加していた。第二に、性に関する悩み（身下相談）は、どの時期にもみられる「普遍的な悩み」、処女・純潔のように、ある時期以降消失する「可変的な悩み」、親密なパートナーとの関係に発生する「関係性の悩み」、自己の身体や性的欲望に関連する「個性性の悩み」等に分類される。第三に、身下相談では女性投稿者の比率が漸増しており、そこでは、「関係性の悩み」が突出して語られやすい。逆にいえば性を、自己の身体や欲望に関連づけるような語り方が、隠蔽される傾向が確認された。

キーワード

身上相談、セクシュアリティ、内容分析、普遍的な悩み、関係性の悩み

1. 方法としての歴史社会学

浜日出夫によると、歴史社会学には複数の流派がある（浜2005）。第一に、過去の出来事が現在においてどのように想起されているか、すなわち歴史の構築を問う「歴史の社会学」である。第二に、ある事象が（社会的に）構築され、変容する構築の歴史を問う「歴史社会学」である。社会学の世界で現在流行しているのは前者、「歴史の社会学」だが、私が志してきたのは、後者の「歴史社会学」である。とりわけセクシュアリティという、私的とされながら、公共的関心の対象でもありつづける事象の「構築の歴史」を描き出そ

うとしてきた(赤川1999)。

本稿は、そうした根本的関心を継受しつつも、「資料に向かい合う作法」(佐藤健二2001)としての歴史社会学を、方法論的に立ち上げることに関わってみたい。歴史学に、歴史的事実を確定する史料批判が存在するように、歴史社会学にも、歴史-社会的事実を画定するための資史料批判の作法が、より自覚的に探求される必要があるからだ。ひいていえばそれが、歴史社会学の作法を、社会調査の新しい方法論として立ち上げることにつながろう。

本稿がとりあげる素材は、「身上相談(人生案内)」である。「身上相談(人生案内)」とは、大衆的な雑誌、新聞、ラジオ、テレビなどのマス・メディアにおいて、質問者が人生上の悩みや質問を投稿し、回答者がそれらの投稿を選択しつつ、回答するコミュニケーションの様式である。池内(1953)によれば、身上相談は、『女学雑誌』『いへのとも』欄の創設(1886年)を嚆矢とする、長い歴史をもっている。現在では、雑誌や新聞というメディアをこえて、ラジオやテレビでもおなじみのジャンルとなっている(『思いきり生電話』など)。社会調査の「質的」方法においても、身上相談はしばしば利用されてきた。とりわけ読売新聞「人生案内」(1963年)を使って「現代における不幸の諸類型」を析出した見田(1965)は、質的データ分析の金字塔とされている。本稿も、見田の作法、ならびにその後展開された身上相談の内容分析の手法に多くを学ぶ。そしてその手法を、人びとの意識・心性・規範の歴史的变化を追尾し、測定するための方法論として鍛え上げたい。それは同時に、近代社会におけるセクシュアリティ(性)の形成と変容、そしてあえていえば消失をも語るための戦略的な拠点となるはずである。

2. メディアとしての身上相談

2.1 先行研究

身上相談を用いた先行研究は、数多く存在する(加藤1953、見田1965、太郎丸1999、池田2005、野田2005)。その多くは、内容分析のかたちをとっている。たとえば加藤秀俊は、当時の読売新聞「人生案内」と雑誌『平凡』を材料としつつ、投稿されるほとんどすべての相談は、「1. 個人の肉体的レベルの問題/2. 対人関係の心理的レベルの問題/3. 対人関係の集団乃至制度レベルの問題」という3つのどれかに分類できるとした。「個人の肉体的レベル」とは具体的には医学、整形の相談だが、個人の気質に関する問題も含む。「対人関係の心理的レベル」の問題とは、「お互いの心の持ちよう一つで解決できる個人対個

人の場で発生する問題」であり、「対人関係の集団乃至制度レベル」の問題とは、単なる人間関係ではなく、集団内の人間関係であり、「心の持ちよう」だけでは解決できないとされる。実際のカテゴリ分け結果は「肉体 143, 対人関係 58, 集団内対人関係 21」となっている¹⁾。

さらに質的データ分析の古典というべき見田（1965）は、身上相談の内容的な分類カテゴリーもさることながら、身上相談というメディアに関する方法論的考察を行っているこ

表1 身上相談の訴えの種類

(1962年, 読売新聞〈東京〉)

純愛	<ul style="list-style-type: none"> 失恋・異性にだまされた その他恋愛関係 	<ul style="list-style-type: none"> 女が男に 男が女に 	<ul style="list-style-type: none"> 17 4 10 	31
結婚	<ul style="list-style-type: none"> 婚期がおくれた, 縁談がない 結婚に親その他の反対 結婚相手に不安・不満 その他結婚問題 		<ul style="list-style-type: none"> 39 12 20 10 	74
夫婦	<ul style="list-style-type: none"> 浮気 夫の酒乱・賭事・乱暴・怠惰・麻薬等 その他夫婦関係 	<ul style="list-style-type: none"> 夫の浮気 妻の浮気 	<ul style="list-style-type: none"> 26 10 28 16 	80
家族	<ul style="list-style-type: none"> ヨメとシュウトメ・(シュウト・小ジュウト) 再婚・後妻・つれ子関係 親子関係(扶養問題・家業継承他) 		<ul style="list-style-type: none"> 23 19 29 	71
生活	<ul style="list-style-type: none"> 経済問題 職場の対人関係 その他生活問題 		<ul style="list-style-type: none"> 68 9 12 	89
青少年	<ul style="list-style-type: none"> 神学・受験・就職 非行・しつけ・その他 		<ul style="list-style-type: none"> 15 30 	45
その他	<ul style="list-style-type: none"> 病気・身体障害・容姿 ノイローゼ・精神障害 一般的な倦怠感・閉塞感 		<ul style="list-style-type: none"> 46 22 23 	63

(注) 年間の掲載事例は304件であるが、2つ以上の問題を含むケースが多いので、合計は304より多くなる。

1) この三分類が、戦後の行動科学の中心を占めてきた3類型に、おおまかに対応していることは興味深い。つまり「個人の肉体的レベル」は、個人の心的過程を自立したメカニズムとして扱う心理学に、「対人関係の心理的レベル」は、対人関係において生じる心理やストレスを尺度化する社会心理学に、「対人関係の集団乃至制度レベル」は集団・制度内での役割や葛藤を問題にする「社会学」の領域に対応していると解釈できる。

むろん社会学自体は、1980年代以降、集団・制度内の役割や葛藤という枠を踏み越え、大きく領域拡張(逸脱?)していくことになった。しかしそれでも、この3類型の変遷、とりわけ時系列的な分布の変化を追跡することによって、不幸や悩みの原因帰属のされ方の変化を問うことが可能かもしれない。具体的には、不幸や悩みの原因は、集団や制度の問題ではなく、対人関係や個人心理に帰責される傾向が強まると考えられる。いわば不幸の「心理学化」である。これは同時に、「心理学化された社会」の一側面とみることもでき、さらというなら社会的な問題構成の民衆レベルにおける消失という、より大きな(かつ社会学徒にとっては切実な)問題につながりうる。

表2 登場人物の集計

(1962年, 読売新聞〈東京〉)

		男 子	158						
性別・ 婚歴別	未婚		72	職業別	専門・技術	17			
	妻帯		71		管 理	8			
	離死別		8		事 務	53			
	不 明		7		販 売	28			
	女 子		308		サ ー ビ ス	17			
	未 婚		112		工具・単純労働	45			
	夫あり		150		農 林 漁 業	36			
	離死別		39		主 婦	132			
性別不明		2		小 学 生	22				
年 齢 別	0-4	13	} 32	学 歴 別	初 級 (旧小, 新中)	24			
	5-9	19							
	10-14	19	} 56				中 等 (旧中, 新高)	27	
	15-19	37							
	20-24	56	} 133		高 等 (旧高・大学)	16			
	25-29	77							
	30-39	94							
	40-49	34	の従 地位 業 別上		雇 主	10			
	50-59	20					雇 用 者	24	
	60-	17							家族従業員
年齢不明	82	雇 用 者		158					
					(注2) (うち官公) (28)				
地 域 別	東 京		216		(注1) 近畿以西は, 東京版には掲載されない. (注2) 学歴および従業上の地位は, 文面から確実に推定できるものは少なく, 大部分が「不明」に属する.				
	北 海 道		3					} 226	
	東 北	63							
	関 東	100							
	中 部	60							
(注1) 地域不明	22								

とに特徴がある。特に質的分析においては、個別事例がどれくらい一般化可能かという「代表性」の基準ではなく、平均的な事例ではあいまいなままに潜在化したり、中途半端なあらわれ方をしている諸要因が、より鮮明な形で顕在化している事例を重視するという、「典型性」の基準こそ重要としたことは、あまりにも有名である。もっとも本稿では、代表性／典型性という二分法そのものよりも、見田が質的データ分析の方法論的基準として、類型、要因、次元、顕現性に対する「カバレッジ」（できるだけ多様で、多くの要素を含んでいること）を重視したことに着目したい。逆にいえば、身上相談のなかにも、好んで投書されやすい問題、あらわれにくい問題があるのである。具体的には、(1)投書のかけない人びとが直面する不幸、(2)インテリの不幸、(3)道徳上のタブー（セックスなど）、(4)政治的宗教的少数者の問題、(5)体制の根元的価値にかかわる要因、(6)あまりにも特殊的・個人的問題、(7)ささいな不幸、である。だが見田によれば、(2)(3)(4)はけっしてあらわれないとはい

えない。(6)(7)は採り上げるに値しない。本当に問題になるのは(1)と(5)であり、(1)の限界を補うために、投書にあらわれる登場人物・境遇にも目をむけ、(5)の潜在的な要因連関にまでさかのぼるという方法論的選択が行われることになる。

そうした方法論的考察ののち、見田は1962年読売新聞の「人生案内」に登場する304件、468人の主要人物を抽出し、その訴えの種類を「恋愛／結婚／夫婦／家族／生活／その他」からなる6つのカテゴリーに分類する(表1)。ついで、登場人物の性別や年代、職業、学歴などを再構成している(表2)。そして結果的には、わずか12の事例をもとに、現代における不幸の諸類型とその要因連関をトータルに描き出すことに成功するのである。

2.2 歴史社会学としての身上相談研究

見田が行った不幸の諸類型とその要因連関の析出は神業的なものであり、その過程を現代に再現することが本稿の課題ではない。ただ見田がここで、身上相談というメディアの「データの質」に関して考察していることに注意したい。というのも身上相談を用いた内容分析対しては、次のような疑問・反論がしばしばなされるからだ。身上相談に現れる事例が、どこまで一般化できるのか。そもそもそれは、本当に回答者が投稿してきたものなのか(メイキングややらせの可能性)。身上相談として紙面に採用されるさいに編集されたり、読者の興味を引きそうな事例が選択的に抽出されるのではないか。身上相談を研究したところで、何がわかるのか。社会学が捉えようとする人々の意識や規範を、身上相談という素材は、適切に「反映」したり「代表」しうるのか。これらの根底的な疑問が、とりわけ質問紙調査・実験などの計量的調査を行う研究者からなされてきた。

多くの質的分析の支持者は、ここで、「代表性ではなく典型性」という言い方を使って反論してきた。それはたしかに、ある意味で不毛な論争を打ち止めにする効果はあったといえる。だがそれは、「量的調査と質的調査は、ちがうもの。ちがうものはちがう基準で評価されるべき、余計な口出しは無用」という形での棲み分けを産み出し、結果的に量的調査と質的調査の冷戦体制を固着させるゆえんにもなってきた。だがむしろ、次のようにいべきだったのではないか。

第一に、身上相談の分析は、その内容だけでなく、そのコミュニケーションの形式に焦点をあてる。身上相談は、新聞や雑誌などの公共マスメディアにおいて、質問者が自らの生活にかかわる悩みや不幸を相談し、回答者が応答するという形式をとる。それは対面的なコミュニケーションや電子的コミュニケーションといかに異なるのか。私的になされる相談と、紙面上でなされる相談とは、どう異なるのか。いわば身上相談の「メディア性」といべき位相に着目すべきなのである。これは質問紙調査によっても、量的な内容分析

によってもけっして明らかにならない事柄である。

第二に、身上相談における回答者の性別にも年代にも、偏りがある。そのうえ語られやすい相談内容と語られにくい相談内容がある。すでに見田が指摘する通り、制度や体制の根元的価値にかかわるような相談はなされにくく、なされたとしても、しばしば個人の問題として矮小化される。加藤の3分類でいえば、集団乃至制度にかかわるような質問は、もともと語られにくいジャンルなのである。そうしたメディアの種差性を踏まえることも、量的な調査には不可能である。

第三に、たとえ身上相談が「偏った」メディアであったとしても、その歴史的变化を追尾するとき、身上相談の研究は、単なる質的調査法の一つではない、別の意味を帯びてくることになる。太郎丸(1999)は、身上相談を利用することの利点として、(1)質問紙調査では立ち入ることが難しいプライバシーや心情に踏み込んだ研究ができること、(2)フィールドワークやインタビューで採取する「昔のこと」は、あくまで現在の視点から振り返った過去の世界・人間観であって、当時の世界・人間観を知るには身上相談のほうがふさわしい、という点をあげている。

たしかにその通りである。特に(2)の論点は、「過去が現在においていかに想起されているか」を問う「歴史の社会学」には不可能な問いである。逆に、「現在が、過去のいかなる構築の上に成り立っているか」を問う歴史社会学にとっては、身上相談における相談のなかみが、量的にも質的にも、時代を経るごとに変化していくということのほうに、方法論的意義をみいだしたくなる。つまり仮に、語られやすい内容と語られにくい内容が存在するとしても、身上相談というメディアは、その偏りを維持したまま、徐々に変化していく。となれば、身上相談というメディアが有する特性を統制してなお、時代の気分や、人びとの意識・規範は、その変化のうえに書き込まれていると想定可能なのではないか。仮にそうだとすれば、この位相は、アンケートなどの質問紙調査によっても、インタビューなどの聞き取り調査によっても、決して明らかにならない。つまり身上相談を分析しなければわからないことである。ここに身上相談という素材が、歴史社会学として有用たりうる戦略的理由がある。

3. 「人生案内」の量的分析

本稿では、読売新聞に長期にわたり掲載されている「人生案内」1年分を20年おきに抽出し、その内容を量的に分類し、質的に分析することを通して、セクシュアリティの歴史社会学に新たな作法を付け加えることを目指す。具体的には1935(昭和10)の「悩める

表3 各年度ごと投稿者性別

年度	男性	女性	件数
35	0	160 (100%)	160
55	87 (30.6%)	197 (69.4%)	284
75	38 (12.6%)	264 (87.4%)	302
95	26 (9.7%)	241 (90.3%)	268

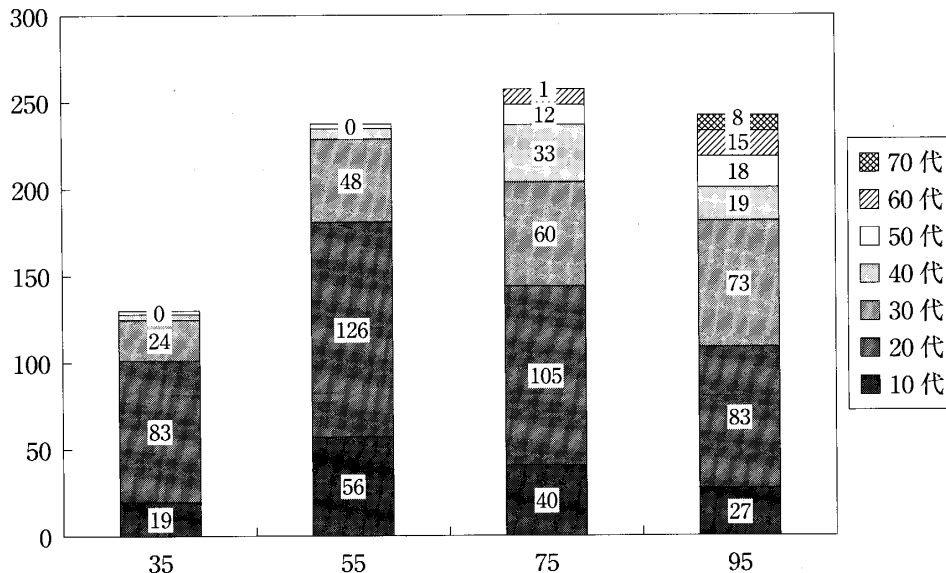
女性」欄，1955（昭和30），1975（昭和50），1995（平成7）年の「人生案内」欄，計の4年分を採り上げる。「人生案内」は基本的には日曜日を除く毎日1回，複数（5～7名程度）の回答者を迎えて掲載されるので，年間300近い相談がある（1935年のみ3日に1回程度）。そこでそれぞれを1件のデータとみなし，相談者の性別，出身地，年齢（年代），相談内容，回答内容を要約する²⁾。各年度の性別は，表3の通りである。

1955年の時点では男性の相談者が3割を超えるが，75年，95年と通減していく。そして95年では10%を割っている。結果的に，現在，人生案内の相談者は9割以上が女性となっている。ここに，身の上相談というメディアが，女性にとっての悩み相談の場として機能するようになる歴史性をみてとることもできる。これを「身上相談の女性化」と呼ぶことにしよう。

ちなみに年代別（10歳刻み）にみると，いずれの時点においても10～30代，特に20代

図1 時点別・投稿者の年齢層

投稿者・年代別



2) 身上相談は，基本的には，相談者自身が抱える悩みやトラブルが語られる形式になっている。ただし75年や95年に関しては，相談者自身が直接の当事者でないケースが，まれに存在する。たとえば60代の人が，30代の娘や息子に起きている不倫などのトラブルに関して相談している事例などである。この場合，30代の娘・息子に則して生じているトラブルや悩みの内容を整理した。結果的に，相談者自身の回答分布とは，多少異なっている。もっとも全体の分布を左右するほどこうしたケースが多いわけではない。

の悩みが圧倒的に多い。

内容の分類にあたっては、見田（1965）の7カテゴリー（恋愛／結婚／夫婦／家族／生活／青少年／その他）を応用した（表1参照）。この分類は、よくできている。まず人生案内では、結婚前の恋愛、結婚の悩み、結婚してからの夫婦関係の悩みが非常に多いので、そのことを反映してか、カテゴリーわけも精緻になっている。ついで家族・親族内の成員（嫁姑、義父母）との人間関係に関する悩みや、扶養・介護にまつわる悩みがくる。さらに生活全般、特にカネにまつわる悩みが扱われ、最後に、家族以外の生活圏、職場や学校や近隣地域の人間関係、すなわちヒトに関する悩みがくる。これらとは別枠で、息子や娘の子育てや、彼らが青年時に抱く悩みを親世代も共有するような形で青少年の問題が扱われ、最後に、病気や生きる意味や自分の人格など、それ以外の全般的な悩みが来る。ライフコースの観点からみても筋が通っているし、「愛」を中心としつつ、「貧／争／病」を取り込み、「心」の問題につながっていく、という大きなストーリー性を有するカテゴリーとなっている。

表4 訴えの種類・新分類

1 恋愛	2 結婚	3 夫婦	4 家族
失恋 異性にだまされた 相手に不安・絶望 不倫、妾 性暴力、強姦、貞操蹂躪 婚前の妊娠・中絶 婚前純潔、処女、童貞 ふたまた 同性愛 手淫 片思い・未練 もてない	婚期遅れた 結婚に親が反対 結婚相手に不安・不満 結婚に躊躇・不安 ふたまた その他	夫の酒乱、賭事、乱暴、怠惰、 麻薬等 不仲、不満 夫（妻）の性格嫌い 秘密（重婚、過去の性関係） 離婚 夫の浮気、妻の浮気 中絶 不妊 セックスレス 性的不能、不感症	ヨメとシュウトメ（シュウト・ 小シュウト） 上記以外の義理関係 再婚・後妻・連れ子 親子関係（扶養・家業継承） 介護 養子縁組 キョウダイ その他
5 生活	6 青少年	7 その他	
経済問題 遺産相続 生活費 職場の対人関係 学校関係 近隣関係 友人関係 転職 犯罪（万引など） 信仰・占い	進学・受験・就職 非行・しつけ その他	病気・身体障害・容姿 ノイローゼ・精神障害・神経症 一般的な倦怠感・閉塞感 自分の性格 孤独・不安 性倒錯 その他	

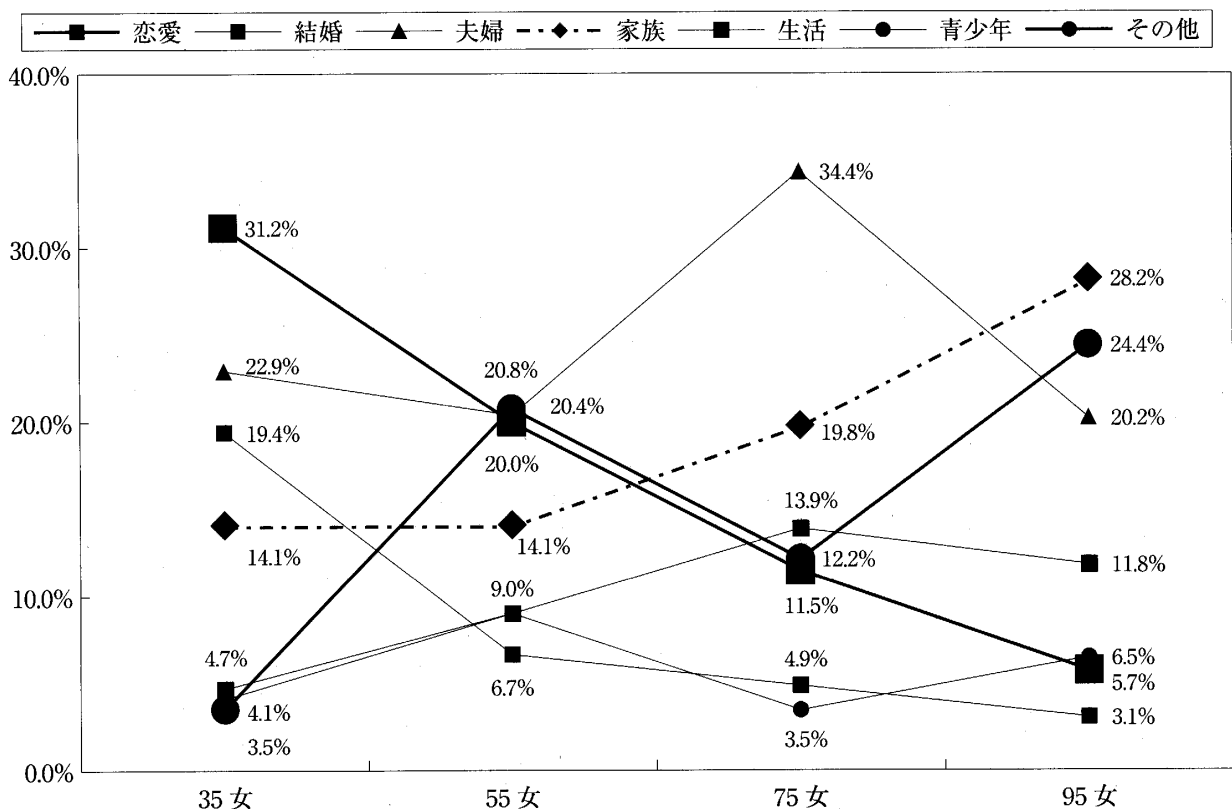
* ボールド体が新規追加の再分類。網かけ部分は性関連項目である（後述）。

ただし見田の分類はあくまで1年分の内容を分類するために考案されたものであり、60年という長期かつ大量の連載のなかでは、見田が想定しえなかった相談内容が数多く存在する。そこで、見田の7カテゴリーの枠組みを残しつつ、KJ法の要領で新たな細分類を作成した。

時点間の比較を可能にするため、女性が相談者となるケースのみを量的考察の対象とする。1～7のカテゴリーに属する相談内容の比率が、時系列でどう変化したかを、図2で示す。ここから、以下のことが読み取れる。第一に、「恋愛」と「結婚」に関する悩みは、時代を減るごとに減少している。「恋愛」は35年には31.2%と全体のなかでも突出していたが、以降、漸減して95年で5.7%になる。相談される回数も、全体にしめる比率も大きく下がっている。「結婚」に関する悩みも似たような傾向を示す。

第二に、これと入れ替わるように、「家族」と「その他」に属する悩みが徐々に増えている。95年の時点でもっとも比率が高いのは「家族」であり(28.2%)、これは夫婦関係以外の家族——嫁姑、義父母、養子縁組——との関係において生じた悩みを扱っている。また見田が残余カテゴリーとしたはずの「その他」が年々増えている。その内実は、病気や障害、容姿など比較的わかりやすい相談もあるが、倦怠感、閉塞感、孤独、不安、自分の性格など、総じて「心」に属する悩みが増えている。太郎丸(1999)は、「人生案内」

図2 相談内容の時系列変化(%)
訴えの種類(%の変化)



では病気、セクシュアリティ、貧困に関する言及は減少しているが、孤独、困った性格、精神的問題など個人主義的人間観を反映する主題が増加していると述べているが、その指摘とも一致する。

本稿はここで、「恋愛」「結婚」に関する悩みが漸減しているという現象に着目したい。特に75年から95年にかけての、「恋愛・結婚問題の消失」というべき大幅な減少は、人生案内における主要テーマが移り変わるという以上に、性に関する意識や意味論の根本的な地殻変動を示唆しているようにも思われるのだ。セクシュアリティの歴史社会学が継受すべきポイントは、これである。

4. 身上相談における「性」の変容と隠蔽

4.1 セクシュアリティに関連する悩みの量的分布の変遷

見田の分類では、我々が通常使う意味での「性」、セックスやセクシュアリティに関連する項目が特別に用意されているわけではない。恋愛、結婚、夫婦などの項目に紛れ込むような形になっており、セクシュアリティはいわば、不可視化されている。

これはむしろ、見田が性やセクシュアリティに関連する事柄を無視したことを意味するのではない。同じ事情は、現代の社会学において「セクシュアリティ」が扱われるときの微妙さとも関連している。あえていえばセクシュアリティは、恋愛、結婚、家族、ジェンダーといった社会的現象から派生する残余物、従属変数としての取り扱いしか受けてこなかった。赤川(1999)では、「性に関する事柄」「人びとが性に対して抱く観念や規範」という意味でのセクシュアリティは、恋愛や結婚や家族やジェンダーに還元されない意味領域を20世紀初めに確立したという歴史的事実を確認した。いったんセクシュアリティの意味的領域が確立すると、それは恋愛とも結婚とも家族ともジェンダーとも異なる固有の力学にしたがうかのように推移していくことになる。具体的には、「性欲」という行為領域が言挙げされ、それに「本能」という意味が与えられ、性欲に対する個人的統御と社会的統制が、ほとんど社会問題というべき水準で論じられた。こうした「性欲=本能論」は、性欲と恋愛という二元論を確立し、「抑えきれない性欲をどの性行動で充足すべきか」という性欲のエコノミー問題を浮上させたが、やがて「性は人格の中核的要素である」とする「性=人格論」へと取って代わられていく。性は、個人の外部で発動する実在ではなく、個人の人格そのものと把えられ、他者との間に発生する人格的コミュニケーションを重視する親密性パラダイムが、1970年代以降、ひとり勝ちした。

そうした事情は、人生案内というメディアにも姿を顕す。すでに確認した通り、身上相談というメディアは、次第に女性によって占拠されていく（身上相談の女性化）。そもそも女性は、歴史的にも現状でも、「性欲＝本能論」に強く絡め捕られたわけではない。恋愛至上主義の信奉者も、性＝人格論や親密性パラダイムを主導したのも、多くの場合女性であった。ゆえに身上相談ならぬ「身下相談」とでもいうべき性関連の事柄は、人生案内というメディアでは、むしろあまり表象される蓋然性がないのである。たとえば私が特に注目してきた「オナニー（自慰）」や「売買春」に関わるような相談は、量的には多いとはいえない。

しかし実際には、性に関する悩みは多くの相談者の口の端に上り、真摯な相談の対象となっている。ここで、表4の網かけ部分に関連する相談を、「身下相談」と定義すること

図3 セクシュアリティに関連する相談の時系列変化

	35	55	75	95
[1 恋愛]				
不倫, 妾	17	17	9	7
性暴力, 強姦, 貞操蹂躪	11	6	4	1
婚前の妊娠, 中絶	8	7	10	4
婚前純潔, 処女, 童貞	3	5	7	1
ふたまた	3	0	0	0
同性愛	0	2	1	1
手淫	1	0	0	0
片思い, 未練	4	7	3	4
もてない	1	2	3	1
[2 結婚]				
ふたまた	1	0	1	0
[3 夫婦]				
夫の浮気, 妻の浮気	13	18	34	8
中絶	0	0	2	1
不妊	3	1	7	4
セックスレス	0	0	13	4
性的不能, 不感症	1	0	5	1
[7 その他]				
性倒錯	0	0	2	1
身下相談・計	66	65	101	38
全相談・計	169	314	349	286
身下相談の比率 (%)	39.1%	20.7%	28.9%	13.3%

にしよう³⁾⁴⁾。身下相談の件数と全体に占める比率は、35年が66件(39.1%)、55年が65件(20.7%)、75年が101件(28.9%)となる。増えたり減ったりしているが、全体の2割から4割弱の間を動いていることがわかる。これが95年になると、38件(13.3%)と急激に減少する。75年は性に関わる相談が比較的増加した時期だけに、特に95年にかけての減少ぶりは際立っている。95年は、自分の性格や孤独・不安に関する悩みが増えたにもかかわらず、性的な内容を伴った相談は減少してしまった。

4.2 普遍的な悩み／可変的な悩み

この変化を眺めて気がつくことは、さまざまな性に関する悩みの仲にも、いついかなる時点でも一定数以上存在する「普遍的な悩み」と、特定の時点に増えたり減ったりする「可変的な悩み」の二種類が、存在することだ。前者の例としては、夫の浮気、妻の浮気、未婚者が既婚者と性的関係をもつ不倫(妾をふくむ)、中絶、不妊などがある。これらは、身下相談の定番といってよいテーマであり、時期によって多少の増減はあるものの、つねに一定数以上をキープしている。逆に、オナニー(手淫)、同性愛などは、1年に1度相談されるかいなかという「変り種」のテーマであり、量的分布を議論することに、あまり意味はない。本来ならばローラー作戦を展開して、すべての記事を列挙しつつ、歴史的な変化を質的に読み込むべきテーマといえよう。今後の課題としたい。

これに対して性暴力、強姦(痴漢を含む)、貞操蹂躪、婚前の純潔(処女・童貞)などは、1935年の時点では、非常に多く相談されていたが、その後次第に減少しつつあるテーマである。特に95年での激減ぶりがめざましい。むろんこれは、性暴力が少なくなってきたことを直接的には意味しない。性暴力のかわりに、職場のセクハラなど新たなテーマが登場してきたともいえるし、性暴力に伴う悩み(トラウマ)は、公共的な相談の対象とは

3) 回答者は、以下の通り。

[1935年] 川崎ナツ

[1955年] 山室民子、森三千代、大浜英子、山本杉、美川きよ、宇野千代、木々高太郎、小糸のぶ(作家)、戸川エマ、保崎秀夫(精神科医)

[1975年] 戸川エマ(評論家)、小山いと子(作家)、小糸のぶ(作家)、平岩弓枝(作家)、鍛冶千鶴子(弁護士)

[1995年] 三枝佐枝子(評論家)、早乙女勝元(作家)、鍛冶千鶴子(弁護士)、保崎秀夫(精神科医)、藤原てい(作家)、落合恵子(作家)、深沢道子(カウンセラー)

4) 性関連項目の定義は、暫定的なものである。人によって、定義者によって、「性」の範囲が変わることに、セクシュアリティ研究固有の難しさがある。セクシュアリティはたんに「異性愛／同性愛／両性愛」というように、性的な欲望や性的指向の観点からのみ定義できるものではない。ただし、セクシュアリティに関しては、その行為が善か悪か、その行為をなすべきかいなかという規範意識が前面に出てきやすい。そうした問題意識が比較的現れやすい相談をとりあげることにした。

なりえない、より深刻な問題として伏在化したとみることにもできる。どちらの解釈がふさわしいかは、量的な分布からのみでは決定しがたい。

ただし婚前純潔（処女・童貞）をめぐる悩みは、伏在化したというよりは、悩み自体が消失しつつあると考えたほうがよいただろう。何も知らぬ幼児処女を犯された（1935.6.11, 悲しい乙女）、恋人から肉体関係を求められたが応じるべきか（1955.3.25, M子）、結婚後11年もたつて「出血がなかった」と結婚時の処女性を疑う夫（1975.11.11, M子）など、婚前の純潔・処女性をめぐる悩みや葛藤は、セクシュアリティが問題化される歴史のなかでも、長い間主流を占めてきた。しかし95年の時点では、まったく取り上げられなくなっている。95年で唯一登場するのは、32歳で恋愛経験のない男性が「どのように女性に接したらよいかわかりません」と悩む「童貞問題」であり、婚前純潔・処女性の悩みは75年を最後に消失したとみてよい。

逆に、徐々に増えつつあるのは、セックスレス、性的不能、性倒錯などのテーマである。特に75年以降、相談者が、夫婦関係の良好さを語る基準として、性生活の有無やよし悪しに言及するケースが増えてくる。相談者が、夫の心変わりを原因に「夫婦生活がいやになり」と告白する妻（1975.3.18, K子）、妻のノイローゼゆえに「夫婦関係も半年以上もな」と言及する夫（1975.5.19, M生）。セックスレスは、夫婦関係が冷えきったことの「結果」なのである。これに対してセックスレスだったり、性的不能（インポテンツ）であるがゆえに、夫婦生活がきまずくなるという相談もある（1975.6.16, T子. 1975.8.5, S生）。セックスできないこと、セックスしないことは、夫婦関係の険悪さの結果であり、原因でもあるという「自己診断」が、相談者自身によってなされるようになっているのである。

4.3 関係性の悩み／個性性の悩み

身上相談は、女性化されたメディアである。ゆえにこうしたメディアにおいては、性（セクシュアリティ）は、たとえば医学雑誌や男性向けの週刊誌で語られるのとは、異なった形で問題化されると考えられる。それは、身下相談の「定番」が浮気、（相手からの）暴力、妊娠・中絶といったテーマに集中することからも伺える。そこで性は、恋人、夫など親密な状態にあるパートナーとの「関係性」の問題として浮上している。下半身をめぐる悩みや不幸の原因は、自らのうちにあるのでも、世間や社会にあるのでもなく、親密な他者とのあいだにこそあるとみなされるのである。むろん親密なパートナーとの関係だけでなく、愛していない男から言い寄られたり、好きでもない男から暴力を受けたりするという不幸も、しばしば語られる。しかしそれさえ「関係性（絆）」の問題として処理されて

しまうのだ。「親密性パラダイムのひとり勝ち」とかつて私がなづけた事態は、セクシュアリティをかような形で、親密な他者との関係性のなかに配置し、還元する言説のしかけが、他を圧して勝利してきたことを意味している（赤川 1999）。身上相談が女性によって占拠されたメディアであり、女性が、男性よりも親密性パラダイムに強くコミットしてきた言説の歴史をふりかえれば、身下相談に現れる悩みは、「関係性の悩み」と呼ぶべき特質を強く担っていくようになると想定される。

このことは、すでに恋愛関係にあったり、夫婦関係にあったりする男女の間だけではない。恋愛が成就しないという悩み、「もてない」という悩みのなかにすら顔を出す。自分が愛する人が自分を愛してくれない「片思い」や、自分がかつて愛した人を忘れることができないという「未練」の感情にさえ、関係性の悩みが露出してくる。「片思い・未練」に関係する記事は計 18 件、「もてない」という悩みは 7 件確認できるが、それらはほとんど「相手がふりむいてくれない」「相手にふられた」「異性にもてるにはどうしたらよいか？」というところに、悩みの原因が置かれている。そこでは、「自分がもてないのはなぜか?」、「もてない自分とは誰か?」という、自己のアイデンティティにかかわる、より根源的な問題は隠蔽されてしまうのだ。「もてない」問題は、「もてたい」問題にすりかえられてしまう。

しかしセクシュアリティは、親密な他者との関係性の中にだけ現れるのではない。それは、まずもって自己が自らの内部に発生する欲動をいかに制御し、コントロールするかという問題であり、次いで、そうした自己制御が全体（社会や国家）とどのように関わるのか、という問題であったはずなのだ。それは、親密な他者との関係の「手前」に存在する事象であると同時に、親密な他者との関係の「向こう側」に成立する事象でもある。おそらくそうした問題に関連する悩みは、オナニーや、同性愛や、「性倒錯」と一括されてしまう自己の性的な嗜好の問題のなかにこそ、まずは強く現れる。

だがそうした悩みは、身下相談においては、ほとんど表象されない。あるいは、ときおり現れる「変り種」のテーマとして、安全な場所に囲い込まれてしまう。この 4 時点に関するかぎり、同性愛も、オナニーも、性倒錯も、それを自己のアイデンティティに関わる問題として引き受けようとする相談は、ひとつも存在しない。「悪癖」の過去に悩んだり（1935. 10. 8, 悩める娘）、同性愛が医学的に異常か正常かという知識を再確認するにとどまっている（1955. 6. 13, 見合いを前に悩む男）。性倒錯（下着集め、ロリコン）は、弟がそうした行為をしているが変態だろうかとか（1975. 7. 15, T 子）、夫がロリコンなのは男の性癖か（1995. 11. 14, K 子）という文脈でしか問題にされていない。個人が、自己の性に向かい合うか、という問いは前面に浮上してこないのである。

悩み全体の分布においては、孤独や不安など「個人主義的人間観」にもとづく悩みが増

えているのは、たしかだ。しかしその影響は、性の領域にまでは及ばない。性の問題を、自己の内的アイデンティティにかかわる「個性の悩み」として言説化するような語りは、身下相談においては、隠蔽されがちなのである。あえていえば、関係性を排除するという契機が、身下相談というメディアからは排除されてしまうのである。セクシュアリティの語りが旧態依然としたまま更新されていないからなのか、セクシュアリティそのものが語るにたるテーマを喪失しはじめているということの現れなのか。どちらなのかを判断するのは難しい。しかしセクシュアリティの歴史社会学は、具体的な歴史的言説を分析することを通して、この課題を自らに問い続けていくことになるであろう。

参考文献

- 赤川学, 1999, 『セクシュアリティの歴史社会学』 勁草書房。
浜日出夫, 2005, 「構築主義と歴史社会学」『日本社会学史研究』No. 27, 日本社会学史学会, 47-52 頁。
池田知加, 2005, 『人生相談「ニッポン人の悩み」』 光文社新書。
池内一, 1953, 「身上相談のジャンル」『芽』思想の科学研究会編, 1953年9・10月号, 8-13 頁。
加藤秀俊, 1953, 「身上相談の内容分析」『芽』思想の科学研究会編, 9・10号, 17-29 頁。
見田宗介, 1965, 『現代日本の精神構造』 筑摩書房。
野田潤, 2004, 「『子どもにとっての家族』の意味とその変容」『相関社会科学』No. 14, 85-99 頁。
落合恵子, 2002, 『人生案内』 岩波書店。
佐藤健二, 2001, 『歴史社会学の作法』 岩波書店。
太郎丸博, 1999, 「身の上相談記事から見た戦後日本の個人主義化」光華女子大学文学部人間関係学科編『変わる社会・変わる生き方』ナカニシヤ出版, 69-93 頁。
読売新聞社婦人部, 1988, 『日本人の人生案内』 平凡社。